



天掛弓雄編輯

隅田川叢誌 全

隅田川神社藏板



澤

敷

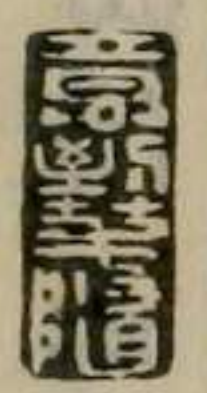


如親

從一位忠興



隅田川普慈寺序



尋水脉之遷轉。追徑路之變易。探荒祠於  
林叢。吊故墓於野坳。徵遺民以舊事。問老  
僧以往蹟。史傳以西之。野乘以泰之。補前誌  
之缺漏。訂口碑之轉訛。神舍矢掛君之著墨  
水叢誌。可謂克勗矣哉。君名多雄。備州人。  
以明治初來。補墨土水神神官。爾來廿五年。  
奉祠之餘暇。好涉畧古典。兼善和歌。嘗撰  
墨水八景。授臺善畫者圖之。每圖係歌一首。

門儿 4  
號 3219  
卷

又徵詩於人。并題其上。揭之祠壁。詩歌之幽妙  
與圖書之澹雅。並稱雙絕。然神舍多有不自  
足。以為墨水之地。以其近大都。四時祀假。皆  
為之文。若詩者。置篇累牘。然或信深傳之孟  
浪。以顛倒事實。或循俗書之杜撰。以誤認舊  
蹟。使識者讀之。殆有不堪噴飯者。因沈潛反  
覆。旁求力索。乃有此著。蓋輯集存闕。並及  
近事。證據的確。不毫增飾。至夫梅寺之再興  
樓花之增植。與紡績之場。松島之園。莫不網

昭和九年

羅而蒼萃焉。可以見古今之盛衰。人事之榮枯。  
不獨資詩歌之料。供騷賦之材也。余置別墅於  
此。十有九年。歲時來往。散策遠近。得於此書  
多矣。及神舍請。不辭為之序。

明治三十五年十月

學海居士 依田百小徹



Very faint, illegible handwritten text within a rectangular border. The characters are extremely light and difficult to discern.

柳舎の... 瑞田川... 抄...  
す... 田... 抄... 瑞... 田... 川... 抄...  
あ... 瑞... 田... 抄...  
あ... 瑞... 田... 抄...  
あ... 瑞... 田... 抄...  
あ... 瑞... 田... 抄...

目  
○



柳葉の清々たる姿を  
 移ろひて見れば  
 昔の日記に記す如く  
 懐かしい情を  
 招き出すものなり  
 故郷の山々も  
 水々も  
 すべて昔を  
 思ふに似たり  
 故郷の人は  
 依然として  
 昔の如く  
 生きている

手紙

田舎の静けさは  
 心をなやませ  
 故郷の風景は  
 心を癒す  
 故郷の人は  
 心を暖かむ  
 故郷の山々は  
 心を鎮める  
 故郷の水々は  
 心を清くする  
 故郷のすべてが  
 心をなやませる  
 故郷は  
 心を癒す場所  
 故郷は  
 心を暖かむ場所  
 故郷は  
 心を鎮める場所  
 故郷は  
 心を清くする場所  
 故郷は  
 心をなやませる場所

三 柳葉



隅田川叢誌

例言

此書ハ東京の隅田川をはしめ此川邊ある神社佛宇名勝舊跡及有名の物をも其實地ハ臨みてまのあと見とめ又其故實来由の傳説を得るハ隨ヒ記載せり  
 本誌ハ明治の始ハ編集結尾ありたるを今上梓するハ就て其後沿革したるハ予註或ハ増補したる所も阿り亦本文ハ洩たるをハ追録もしたり  
 さてその説ハ社寺の傳記郷村の舊録古老の口碑等ハ據て其確説を輯録し又吾々考證をも述へたり  
 また隅田川八景ハ本文ハ隨ヒ卷中ハ配置を但挿畫ハ明治四年の真景を寫し所おれハ今の實況と違へるものもあるもその後沿革したるなり看者あやむことありれ

編者 志る 氏

隅田川八景の真景を寫し所おれハ今の實況と違へるものもあるもその後沿革したるなり看者あやむことありれ





隅田川叢誌

目錄

- 隅田川 同八景卷  
中配置
- 荒川
- 關屋の里
- 隅田の櫻
- 梅若塚
- 淺茅ヶ原鏡ヶ池
- 首塚
- 若宮八幡宮
- 多聞寺の狸
- 長命寺
- 浮島
- 綾瀬川
- 向嶋
- 西葛西領の古碑
- 木母寺
- 隅田堤并白鳥池
- 鐘ヶ淵
- 旗上石
- 白鬚神社
- 牛御前社

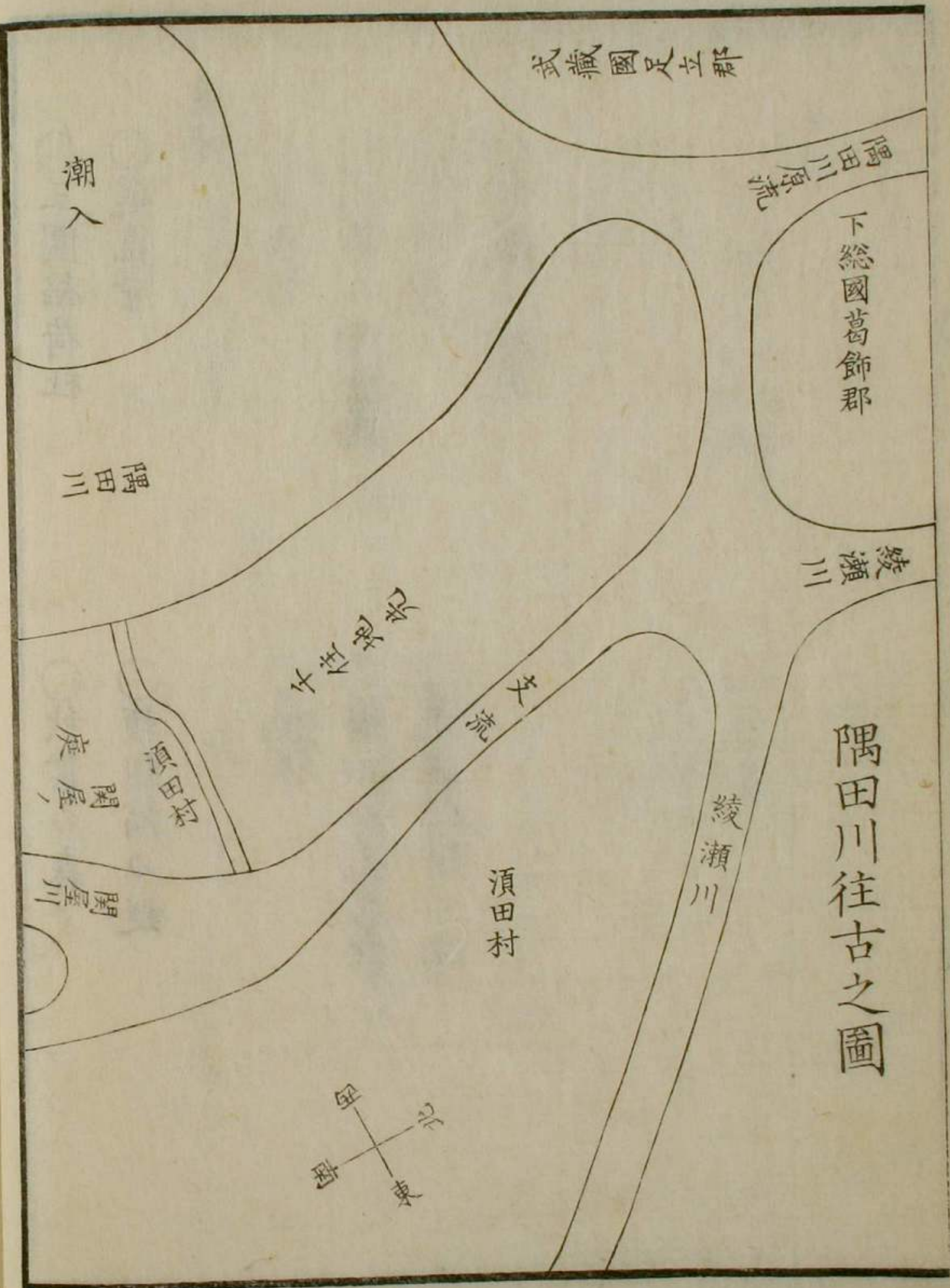
- 三圍稻荷社
- 蓮花寺

追録

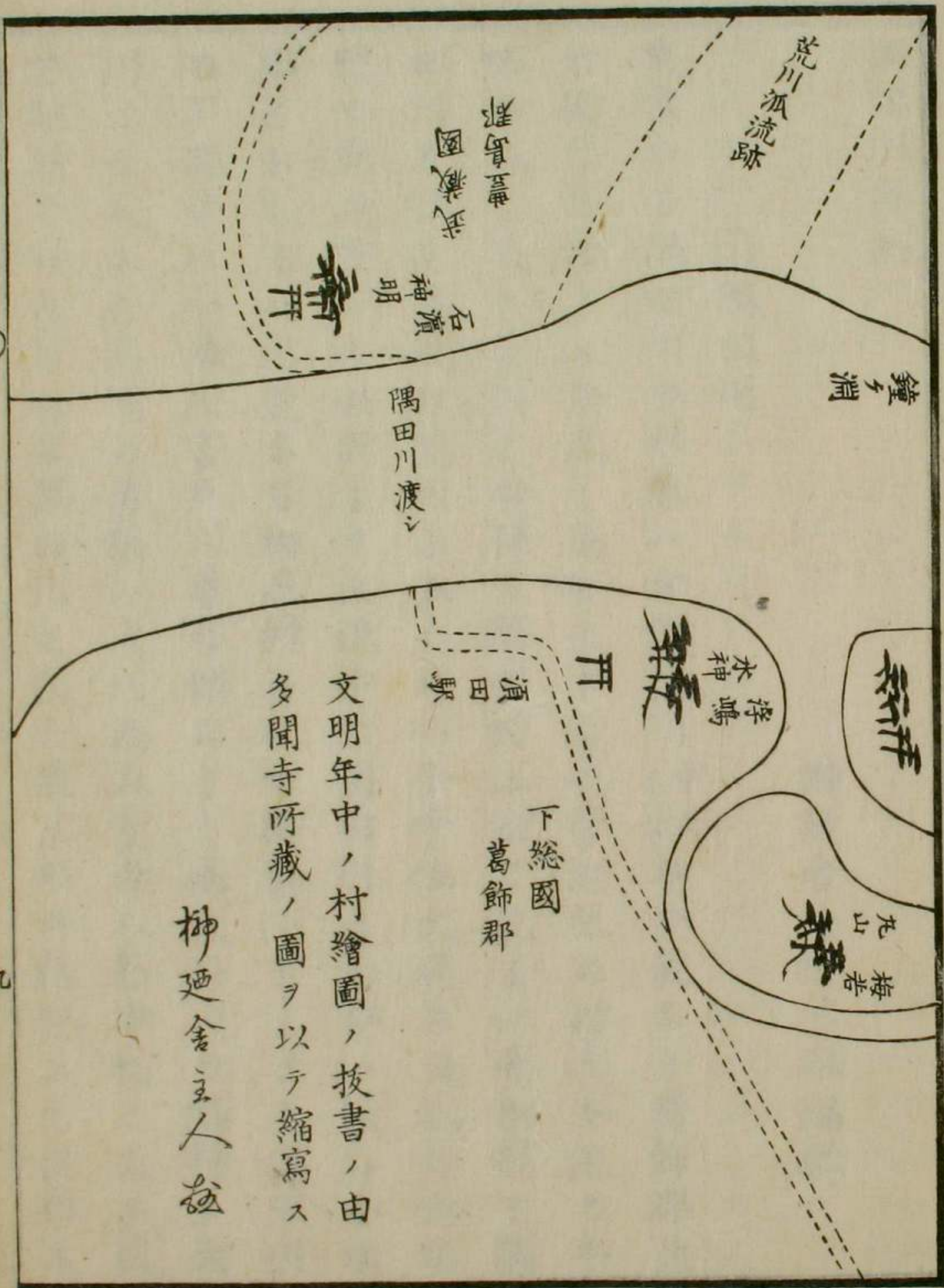
- 曳舟川
- 向島の花屋舗
- 小松島
- 川邊の沿革

- 秋葉の森
- 頼朝橋の鎧

- 枕槁
- 堀切の花菖蒲
- 鐘淵紡績工場



隅田川往古之圖



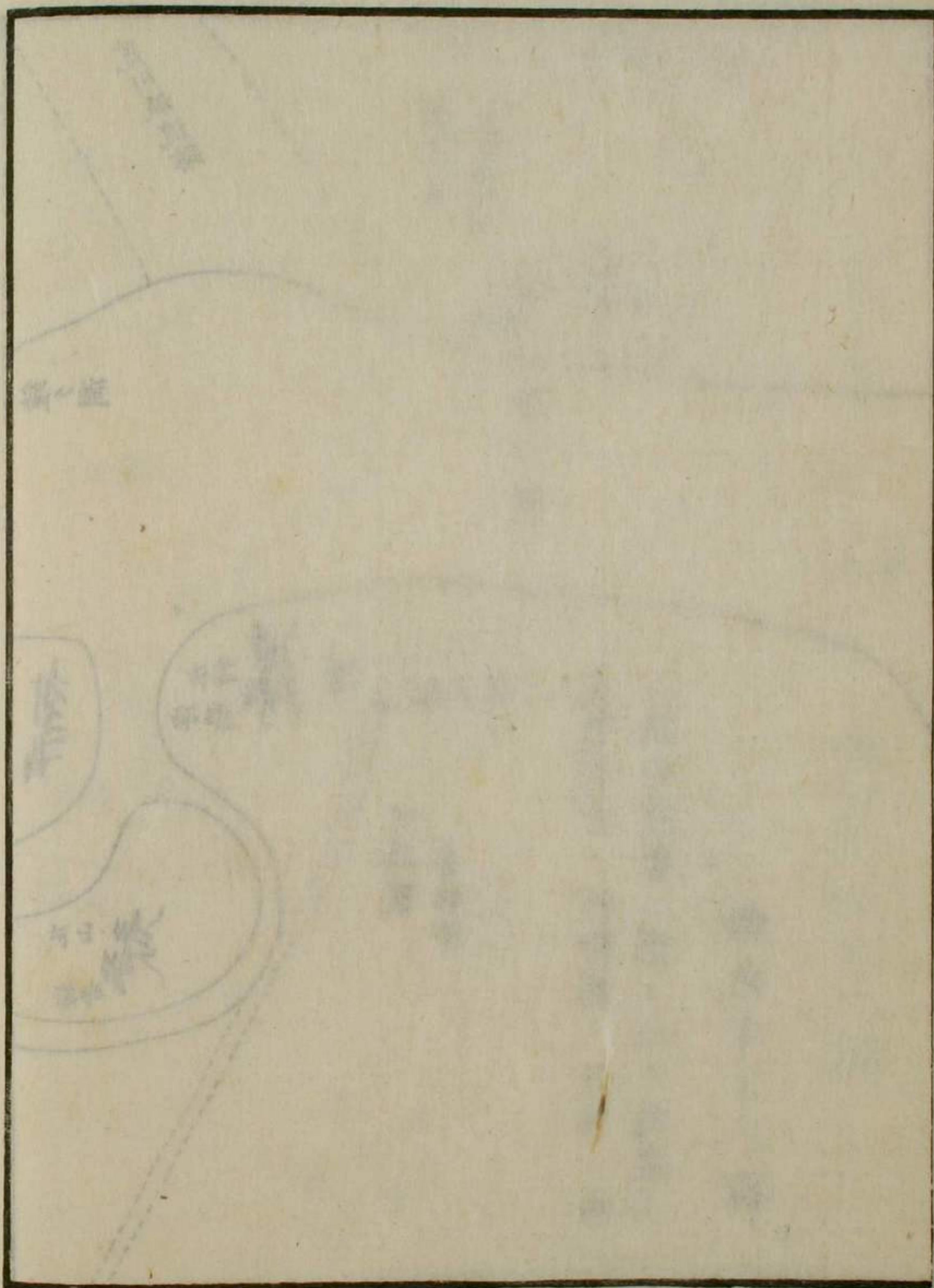
文明年中、村繪圖、抜書、由  
 多聞寺所藏ノ圖ヲ以テ縮寫ス  
 柳廼舎主人 茲

隅田川叢誌

○隅田川

神延舎矢掛弓雄編輯

東京ある隅田川の水原ハ古利根川中川の分流あり葛飾郡長右衛門新田より分派し亀有上千葉小管柳原の村々を経て牛田の西ふ至り荒川と合併し隅田村ふ沿て流るゝ所を總て隅田川と稱す原流の荒川ふ注ぐ所ハ今千住大堤の大塚と云水門の南の方あり此所より上流を古隅田川と云今ハ僅ふ小水路とあれり此川邊ある柳原村ハ往古柳多く有しとそ隅田川の下流昔ハ今津川宮戸川等の稱あり也又此川の總稱を大川と云故ふ吾妻橋の舊稱ハ大川橋あり世人吾妻橋と云ふ因て維新の後改めらる隅田川と云ハ東京の外紀伊ふも出羽ふ



もあり新勅撰集小辨基法師の歌まつち山夕越ゆきて庵崎の  
すゝと川原ふ獨かも祢むとあるハ紀伊あり現今真土山も庵  
崎も阿り駿河ふありと云ハ誤のよく先達の説あり東京の隅  
田川ハ関屋の里ふ阿り元より真土山も庵崎もなうりくを紀  
伊の角田川ふ擬て淺草ある金龍山を待乳山といへり此山  
ふ戸田茂睡と云人あれとハ夕越て行人も見よ待乳の山ふ  
残をことの葉とよめる歌の碑を建又小唄ふも作り詩歌も數  
多ありて待乳山の名ハ高くありたきともいまく庵崎と云所  
ハ定まりとる地あく東京の隅田川ふ庵崎をよめるハ實地を  
知らぬ誤ありハ雲御抄名所の部ふすみと川下総いふさたの  
と註のあるハ隅田川ハ下總ふあれともいふさたのといへる  
ハ下總とも駿河とも詳ふ知きさる故あるへく紫の一本ふ庵  
寺ハ梅若の北

とあるハ関屋の庭の誤あらむ又ハ其北の二軒家の  
邊をいひくハ此邊ふ元より庵崎と云所あく隅田川ハ  
往古下總と武藏との國境ふ阿りくを徳川家康公新利根川を  
國境とく給ひく故ハ隅田川より東新利根川までの間を里俗  
新武藏と云隅田川の白魚ハ同公伊勢の粟名より魚種を取よ  
せて千住の川上荒木田ふ飼付給ひくより此川ふ生はと云今  
ハ甚少くなりて川尻ある佃島邊ふ多く生るあり  
因ハ云隅田川の流燈會と云ハ昔牛嶋弘福寺ふて盆供養  
ハ水燈會と云て隅田川ふ燈火を流くつといふ思より  
て言問團子店の外山佐吉と云風雅人隅田川の溺死人供  
養のとめ都鳥の形ちの燈籠を作り七月一日明治十より  
三十日の間水神森より吾妻橋の間ふ流く舟ふて樂を奏  
して曳廻る是を流燈會と云毎年一回執行く三年ふて

偶田川八景

浮島秋月 石棗正生題

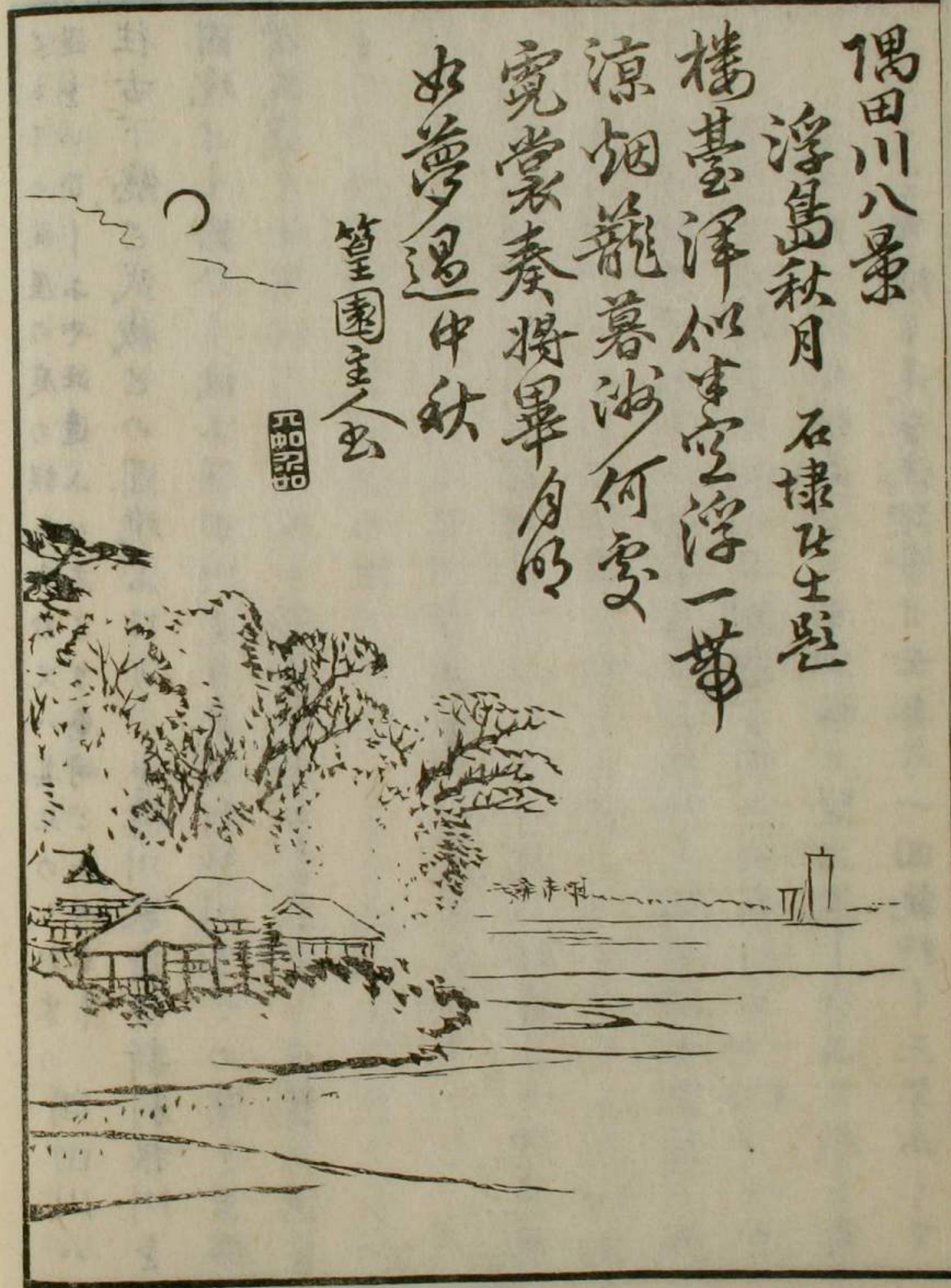
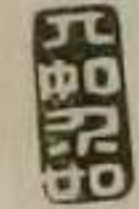
樓臺洋似事空浮一草

涼烟籠暮渺何處

霓裳奏將畢月何

如夢過中秋

篁園主人書



茶のい

あられ

とひ

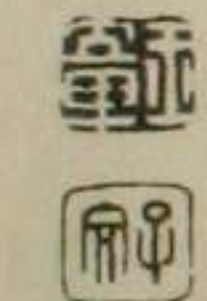
きの人

いさはやく

うき一海

月

木村正辭



其後ハ盆三日の間のみ行ひ七回お至りて止めされとも  
後の参考お追録せ

○浮嶋

隅田川の浮嶋と云ハ隅田川神社の社地あり此社ハ水神船靈  
の兩神を祀る故お水神の森とも云里傳お此社地ハ昔より  
いなる大洪水おても浮て沈む事あり故お浮嶋と云とそ按  
ふお土地の浮くこと有へら依て出水の度毎お現況を見  
るお水面聊高低の筋ありて社地ハいつも低き筋お當れり大  
堤より見れハ社殿より社務所ハ低き故お四五尺も水中お沈  
たりと見ゆ舟お乘て来れハ近寄お隨ひ漸く高くあるやうお  
見ハ社地お至れハ水上お有り然きハ土地の浮くおあらは  
社邊ハ水低く流る、故お浮く如くお見ゆる也昔ハ此浮嶋の

南お隅田宿有り奥州街道の驛舎あり、其後千住通りお街  
道替り又慶長年中大堤築造ありて隅田驛の人家皆堤内お移  
たり故お浮島の邊を元隅田と云社前ある水神道と云ハ奥州  
街道の跡おて道の西通りお隅田川の渡り有也在原中將の  
いさ言問おむ都鳥と歌よみたまひハ此所あり故お浮嶋を  
言問の岡とも云とそ又隅田宿おハ「ケコロ」と云飯盛遊女おと  
ありて昔ハ盛あるものなり」と云治養の頃源頼朝卿此渡り  
場お船橋を繫きて軍勢を渡り給ひ建久の頃橋を架きたまふ  
里俗是を頼朝橋と云隅田川お橋を架せハ是を始と云其後  
長祿年中太田道灌又仮橋を架是を道灌橋と云其後猶下の  
方お寄て繼てお隅田橋或ハ「ゲン」橋と云仮橋を架せ  
も出水の止めお落とり  
「ゲン」橋ハ源六ノ誤傳おて橋を架せ  
人の名あり元祿より前のこと也

そ今川底ふ橋杭の残たるを頼朝橋の跡と云是ハ見知れる人あり

○荒川

荒川の水原ハ秩父山の奥より出て東ふ曲流し隅田川綾瀬川等合併して下流大川とあり海ふ入る往古荒川ハ千住大橋の下の方より二派とあり一ハ東ふ直流して石濱今橋場といふ神明社の北字潮入の高洲の南を過て隅田川ふ入一ハ北へ斜ふ流て潮入の北ふ至り隅田川の原流と會して今の隅田川とあれり其東流せし一派の水路ハ漸々淺洲とあり葭真菰と生茂り終ふ水絶て今ハ田畑とあれり潮入ハ荒川二派の中ふあり高洲の地ふて一村の地形をせり昔ハ此大川筋ふ橋ハあかましく今ハ五の大橋あり則千住吾妻兩國新大橋永代等あり

千住大橋ハ永祿年中初て架せしか洪水の時落て舟渡しとあり其後仙臺伊達侯再ひ橋を架せられし也其橋杭今僅ふ残きりと云兩國橋ハ万治二年吾妻橋と新大橋ハ安永三年永代橋ハ貞享十二年ふ架しとる也明治七年鹿川岸の渡し場ふ橋を架して鹿橋と云合て六大橋とあれり

○綾瀬川

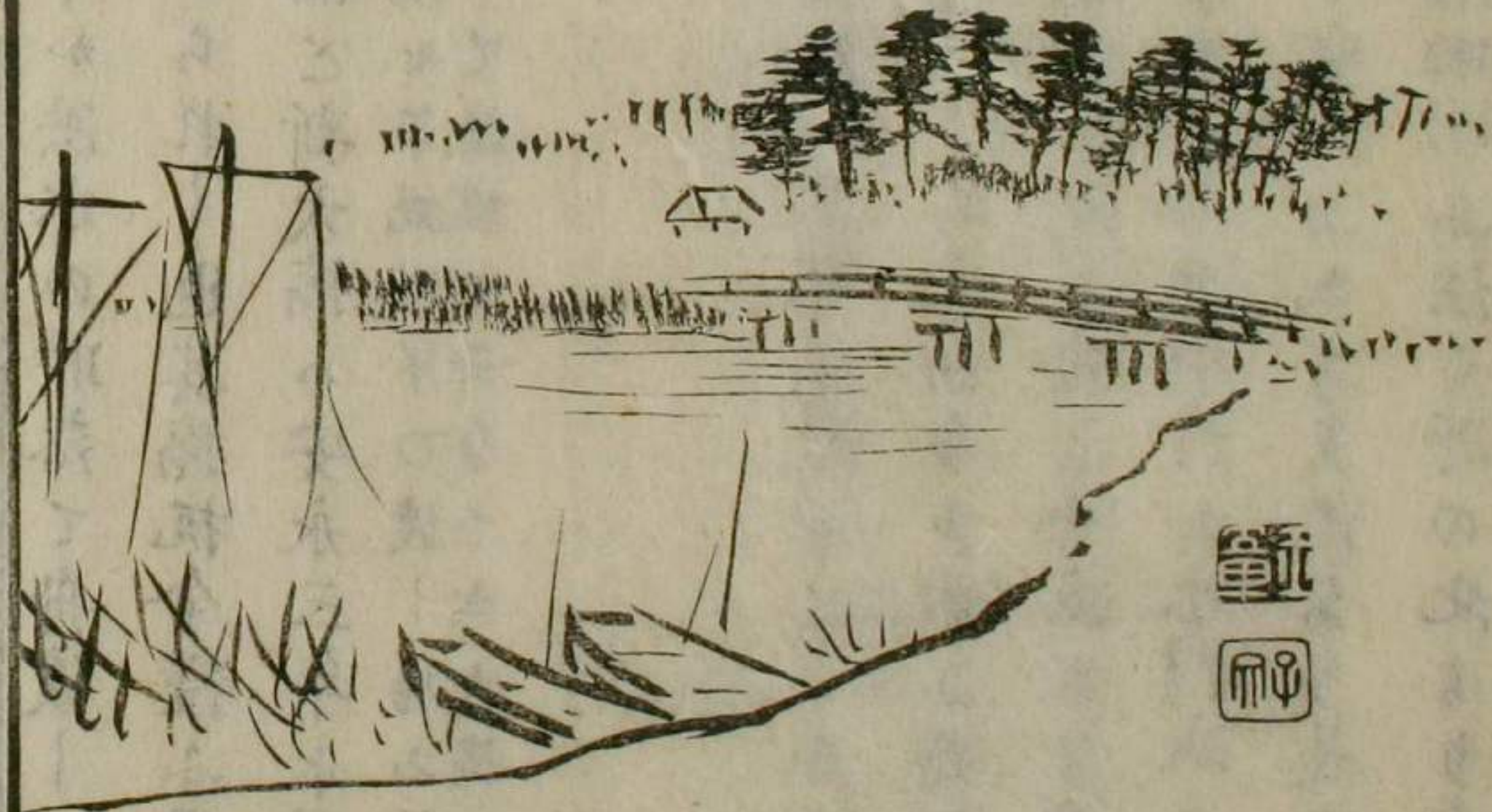
綾瀬川ハ荒川の支流あり往古綾瀬川其外惡水おどりの小川等數多有しり此川筋ハ地形中窪ふして水田多き故ふ徳川家康公更ふ今の綾瀬川を疏通し給ひし也上流ふ分派あり中川ふ注ぐ本流ハ直流して隅田川ふ入る今隅田村の水門坎と云より堀切木下川等の村々を過て中川ふ入る支流あり是古綾瀬川の跡あり又今の綾瀬川の隅田川ふ注ぐ所の北より大堤

後瀬帰帆  
 筑岸雙髻  
 媚斜曛綾  
 懶清波織  
 穀紋楊柳  
 絲々細於雨  
 春帆影落  
 暮江雲

即山題

篁園書

PARB



篁

園

在久并北江上

あまのこ

由安河

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

あまのこ

久米幹久





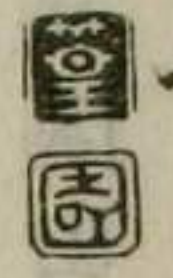
ふ沿たる支流を古川と云丸山の北ふ至り分派し一ハ関屋の庭の東南を廻りて隅田川ふ入る是を関屋川と云一ハ猶大堤ふ沿て梅若塚の東南より西ふ廻りて樽塚と云所より又関屋川ふ會き此古川の水路ハ木母寺移轉の節埋地とありて絶たり今梅若境内東南の方大堤際ふある小池又表門内より水神橋迄僅ふ残れる水路ハ其跡あり綾瀬川の上流ふハ舊水路の跡所々ふ存在せり又綾瀬川の隅田川ふ入る處昔ハ千住の地先ふて関屋の庭の北まで陸地續きありしを切割て綾瀬川を直流ふ通しとるなり此川口の西北ある高洲の尖出したる角ふ大なる榎一本ありしハ洪水の度毎ふ此地先欠崩れて天保年中の洪水ふ榎も流失したりとそ

○関屋の里

関屋の里と云ハ隅田川邊ある村里の總稱ふて寺嶋村より千住川原までを一圓ふいへる也昔関屋の天神の在し所ハ今の関屋の庭の内ありしを徳川將軍の御庭とありし時千住川原の東ある今の地ふ移されし也然きハ関屋の里とハ此邊の舊郷名あるを今俗関屋の庭の所とのみ思へるハ誤也此庭ハ関屋の里の内ある一の庭園あり長祿年中太田道灌江戸在城の頃始て逍遙場とし天正十八年徳川家康公亦遊園と定め給ひ隅田村坂田彌次右衛門へ御預けふある其後四代將軍家綱公明曆三年五月木母寺の側丸山の上ふ御殿を建給ふ隅田川御殿と稱す御殿跡今植半と云割烹家の地あり御庭内ふ在し銀杏の老木今ふ存在せり此時坂田彌次右衛門ふ命せられ関屋の庭ふ西瓜真栗瓜其外前栽物を作らせらる依て関屋の御前栽畑とも云ハ代將軍吉宗公享保二年

吳屋松自  
 把酒新衣  
 晴窗紫雲  
 江烟翠暈  
 鏡底白漁  
 撐近岸石  
 松粉探珠  
 錦湖題

篁園書



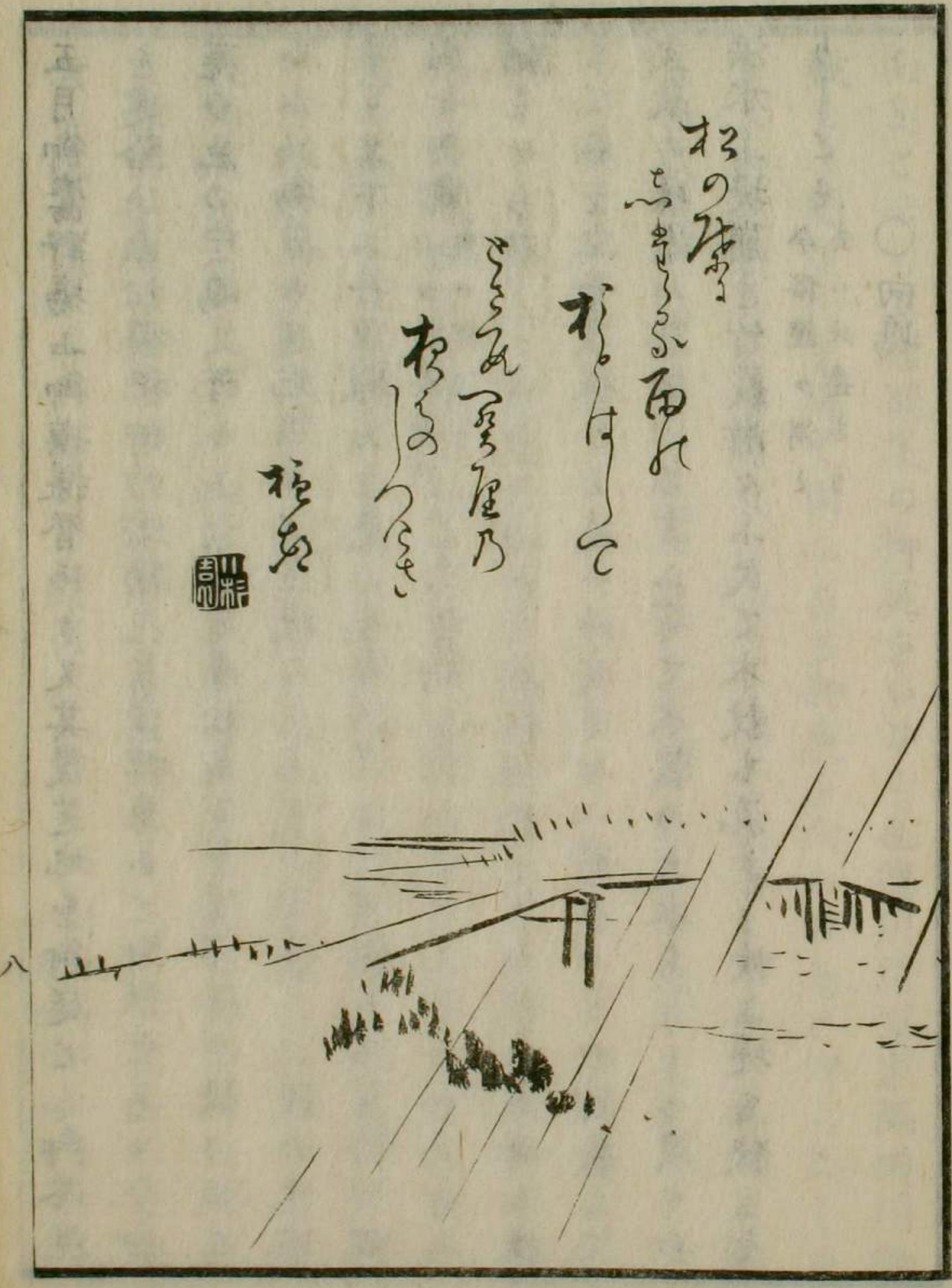
松の岸  
 晴きふり  
 松の岸

松の岸

松の岸

松の岸

松の岸



五月御鷹野場ふ御模様替あり又其後芝地を御庭と御茶屋  
を建給ひ赤松櫻桃柳竹躑躅花菖蒲櫻草と御植付あり今御  
庭の池の中嶋又所々ふ大なる赤松あるを里俗御手植の松と  
いふ此御庭の西北隅の汐除堤の上ある小竹藪ふ木穀の老木  
あり其下ふ丹頂塚あり是ハ先年此所ふ丹頂鶴を飼置給ひ村  
内七兵衛山口ハ左衛門と云者鶴を飼ふこと上手也此者ふ  
飼せられし頃先々代ありはむ其後鶴死し依て此所ふ埋  
きて石を立丹頂塚と云昔ハ此處方七八間ハありの竹藪ふて  
文政の頃迄ハ隅田川の方ふ寄て木穀の大木ありし度々の  
洪水ふ堤崩き竹藪漸々ふ欠て木穀も流きし故ふ堤も狭くな  
りしとそ今俗鐘ヶ淵と云ハ此邊あり

○向嶋

向島と云ハ其始関屋の御庭をいひ也徳川將軍家隅田川御  
殿より関屋川を隔て向ふある御庭を向ふの島と仰られしゆ  
るふ御庭預り阪田彌次右衛門より御前栽畑ふ作りて御城ふ納  
る西瓜真菜瓜などを奥向ふて向嶋の西瓜向島の真菜といひ  
し終ふ府下ふ移りて今ハ隅田川向ふの地を一圓向嶋と總  
稱しけり按ふふ関屋の御庭ハ関屋川東南を廻り西ふ隅田川  
北ふ千住地先と隅田村境の小川あり四方川ふして實ふ一小  
島の地形あり関屋川ハ昔より橋を舟ふて渡りし也明和年  
中濱御庭を御遊園とし給ひ隅田川御殿御取拂ひの後ハ將軍  
家御成の度ことふ仮橋を架き是を御渡り橋といひし後ふ  
ハ常ふ仮橋を架して関屋橋と云今ハ関屋の庭又前栽畑とも  
云て花の頃ふとハ諸人の遊園となりたり明治七年ふ至りてハ関屋の庭并ふ前

栽畑とも開墾  
田地とあり

○隅田の櫻

享保二年徳川吉宗公隅田川御殿より隅田村大堤通り寺嶋村御上り場の通り迄堤上ふ櫻桃柳等御植付ありて御庭内と仰出されし也此時王子の飛鳥山品川の御殿山へも櫻を植付らる是より毎春看花の御成あり又隅田の櫻と稱して花見人群をあせり其後文化の頃寺島の有志者白鬚社の前後堤上ふ山櫻を植る天保の頃ふ至てハ隅田の櫻枯朽し故ふ同二年坂田三七郎有志者と計りて植繼ぬ又寺嶋須崎小梅等の堤ふも二百本の櫻を植とり又弘化の頃有志者須崎の堤ふ吉野櫻を植る其前ハ牛御前社の近邊ふ七八本の櫻ありしのみ其後嘉永年中寺嶋の堤へも又吉野櫻山櫻等を植又隅田村の堤ふ有志者ハ重櫻を植増とり向島

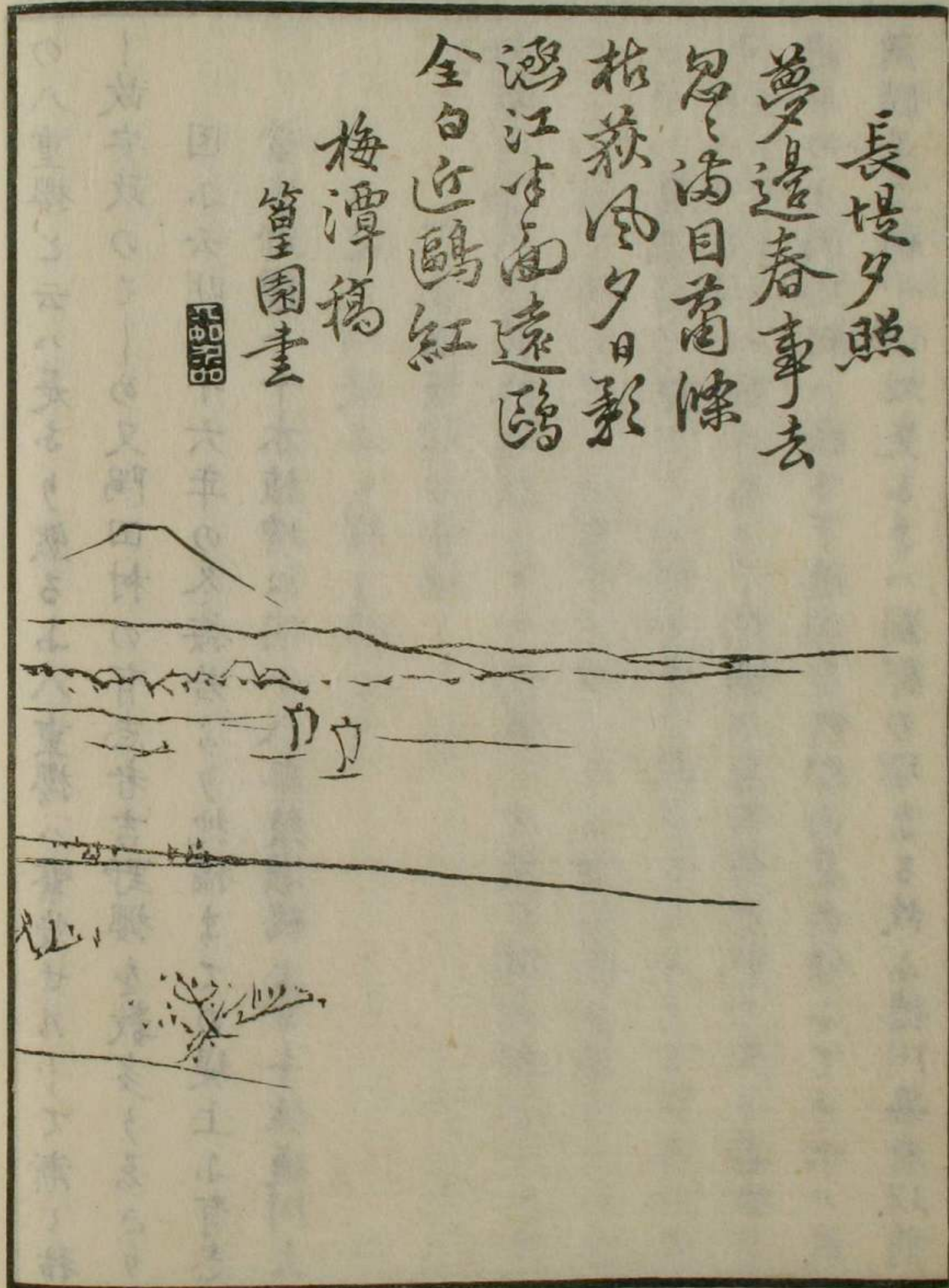
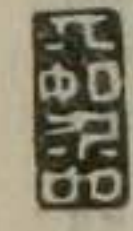
の八重櫻と云ハ是あり然るふハ重櫻ハ繁茂せしめて漸く枯し故安政のそしめ又隅田村の有志者吉野櫻を數多うゑとり因ふ云明治十六年の冬梅若より枕檣までの堤上ふ有志者吉野櫻一千本植増ぬ同十八年綾瀬橋より千住通川上川口迄荒川堤ふも櫻を植とり

○西葛西領の古碑

維新の際隅田村綾瀬橋より千住通り大堤の隅田村と千住牛田との境の所ふ従是南東京と標したる傍示杭を建られし此所ハ舊幕府の時江戸の堺なりし故あり又今よりハ五六十年明治の初年以前此處ふ下總國西葛西領と記したる甚古き建石あり隅田村ハ往古下總國葛飾郡西葛西領ふて牛田ハ武藏國足立郡千住地先あきハ國郡の堺ある故ふ徳川幕府以前

長堤夕照  
 夢邊春事去  
 忽覺滿目蕭條  
 枯荻風夕日影  
 灑江生面遠鷗  
 全白近鷗紅

梅潭稿  
 篁園畫



春  
 遊  
 之  
 記  
 竹  
 石  
 山  
 水  
 畫  
 卷  
 之  
 一  
 矢掛可樹



お建たるう残りしあらむ其後此所より少く西の方牛田の西  
光院へ行道の辻お建て有しを近頃又同院の境内お移して建  
たるを見しゆか、しけむ今ハあくなりたりと多聞寺の快  
善老僧の物語ありき

○梅若塚

梅若塚の縁起お云村上天皇を始とし冷泉圓融の三朝お仕へ  
て和漢の才ある吉田少將惟房卿と云ハ一子無ふより日吉  
の神お祈しお梅花の如き奇花を食すと靈夢ありて生たる子  
を梅若丸と云母ハ美濃國野上の長者の娘龜壽後お花子御前  
と云梅若丸五歳おして父おおられ七歳おかりて比叡山月林  
寺お入て修學を十二歳の時事故ありて離山し北白川の家お  
歸らむとし道お迷ひて大津おさまよふ時お信夫の藤太と云

人商人欺きすありて連來る旅中兒病お罹り漸く隅田川お至  
り歩行する事を得て藤太無道おして弃置て去る隅田関屋の  
人々あそれきて介抱されとも病重くなり終焉お臨みて一首  
の歌お尋來て問ふ、答へよ都鳥隅田川原の露と消ぬと終お  
貞元々年丙子三月十五日此處お早世し此時羽黒山の下總坊  
忠圓爰お會して作善をおし遺語お任せて塚を築き柳を栽て  
標としとあり村俗の口碑お梅若丸兒おて女の姿ゆる奥州の  
人買藤太連來りし男おて其上病氣發りけきハ山玉塚の傍  
お捨置しを村人あそれみ看病せし終お死ふれハ其所お  
葬て柳を墓標としたりと云其柳ハ枯て度々植繼し梅若社  
の後ろ玉垣の外一間餘の道を隔て武藏屋清五郎と云料理茶  
屋の杉垣の際お在て安政の頃までハ大なる柳の朽て有しと

云今ハ跡もなくあれり又此社の後ろ玉垣の内ふ甚古き小祠の形ちある石墳あり木母寺の言傳ふ昔より大切の墓也といへるよゝ其石墳の西傍ふ更ふ植たる柳の若木一本ありゝゝ維新の際梅若山王權現を梅若社と改號ゝ古墳ハ取除たり其後柳ハ枯ふり此古墳文政以前ハ朽たる柳の傍ふ在ゝを以つゝ玉垣の内ふ移せゝ也又丸山ふ山王塚ハ元より在ゝ由あれハ梅若丸の靈を合祀して梅若山王といひゝふや又埼玉郡粕壁宿邊ふ古隅田川と云あり川ふ沿て古街道と云堤も有て其布とりある満藏院と云寺の前の畑中ふ梅若塚と云小なき塚あり是も祭ハ三月十五日あり向嶋の梅若ハ此所より移ゝたるもの也と云里傳のよゝ多聞寺の語ありき前年抄出ゝる縁起ハ仮名書繪入の巻物あり幕府の奥向へ度々御覽ふ

入ゝこと有て破損せゝ故寺社奉行安藤對馬守ふ命せられ新ふ書改て下附ゝ給ひゝものあり然きとも梅若丸の實否亦其母花子の説等も謡曲ふとに傳へて種々あれと確ある事實ハ知かゝゝ

○木母寺

木母寺の開基ハ下總坊忠圓と云梅若塚の傍ふ仮初の庵を結ひて梅若丸の靈を弔慰せむと毎日念佛申たるゝ隅田川太念佛の起りありと云後ふ一寺を創立して梅若寺と云治承四年源頼朝卿軍兵を引卒して隅田驛ふ至り隅田川を渡らむとゝ給ひゝ時洪水ふて風波暴く渡りかゝ故ふ梅若寺ふ御止宿ありゝふ因て高五石の田地を此寺ふ附ゝたまへり又徳川家光公二十石の地を増附ゝ給ひ都合廿五石の御朱印となれり

梅塚暮雪

王孫墓畔

柳無絲贏得

行人凍淚垂雪

似梅花こふ尺氷

魂墮氷白鷗疑

槐南大末題

篁園子直玉



つのはよのこゝろ

ちひやうを

夕風

雪をまあるは

く川あさり

ル

飯田武郷





慶長年中近衛閑白信基公隅田川御遊覽の節此寺に御入有て  
梅若塚の柳の枝を折て筆と給ひ額に木母寺と書給ひしに  
依て寺號を改たり此寺に地形甚低き所にて洪水の時水押  
入し付文化の頃今の梅若裏門内なる古川を埋て移しあり  
故に古川の支流に絶たり今境内の東南にある小池に其跡あり  
り木母寺より北の方も漸々埋りて田地となり今に古川敷と  
云字のに殘れり往古に丸山の北の方には辨天堂ありて此邊の  
字を閑屋といひしに辨天堂のある小山を辨天山ともいへり  
此邊に漁師多く又けころと云遊女おとも住しこそ木母寺  
に維新の際住僧復飾して梅若社の神主となりし故に廢寺と  
ありし隨て大念佛も絶たりき

因ふ云明治二十二年四月舊木母寺の西隣地は木母寺を

再建し又同年八月梅若神社をも佛に改祭の儀願濟ふて  
今に梅若堂梅若塚等も改稱したり

○淺茅ヶ原鏡ヶ池

梅若丸の母を縁起ふに亀壽又花子御前といふとあり梅若丸  
の行方不知ありしより狂氣の如くありて其行方を尋むと筈  
に扇を付て吾の子を返せ吾の子を返せと云つ、諸國を廻り  
隅田川の渡に來ふれは里人集りて一周忌を弔ひ念佛供  
養し居るに驚き哀しみ直に薙髪して妙龜尼といひ下總坊  
の草庵に止りて毎日念佛して在し其後天元々年三月十五  
日淺茅ヶ原の鏡ヶ池に入て没したりと云鏡ヶ池は橋場の總  
泉寺前此邊を總て淺茅ヶ原といふ松並木二丁はより南の方出山寺の北隣  
地にて今に小池あり池畔の東北に妙龜尼の衣掛松と云有松

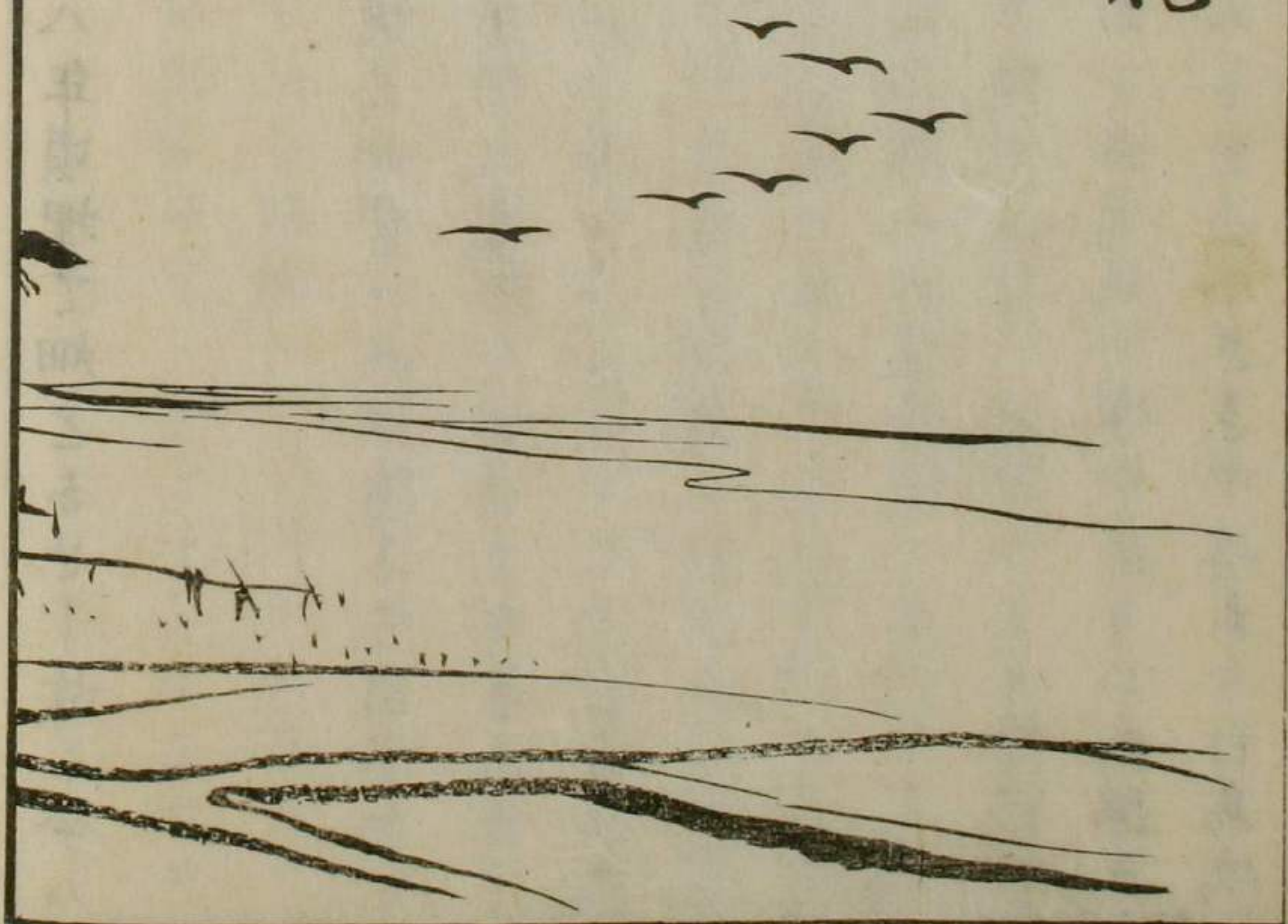
の下に碑あり元の松ハ朽て植繼とるゝ又寛政四年十一月十七日大雪ふて折々れハ明年二月十七日植繼とるよゝを記せ  
至亦寛文の頃新吉原雁金屋の遊女采女十七歳ふて事情あり  
て此池ふ身を投て死したるよゝ詳ふ記して同寺の門前ふ碑  
を建とり是を采女塚と云浅茅ヶ原の松竝木の道の傍ふ大なる  
石地藏ありしを維新の際並木の松を伐取石地藏ハ總泉寺  
の入口ふ移したり此邊共葬地とありし亦砂利取場とあま  
り元石地藏の在しほとりふ小高き丘陵あり是を妙龜比丘の  
墓のよゝ口碑ふあり古き石墳もあり其形ち小祠の如くふて  
椽の形ちもあり戒名も梵字もあく無銘ふして何人の墓とも  
知らざし或人云妙龜尼を班女の事のやうふ云説あれと班女  
ハ支那の故事を花子ふ附會したる謡曲ふよりて誤れる也と

因ふ云鏡ヶ池ハ明治十八年頃埋て畑とあせし故ふ今ハ  
跡形もあくなりぬ

○隅田堤并白鳥池

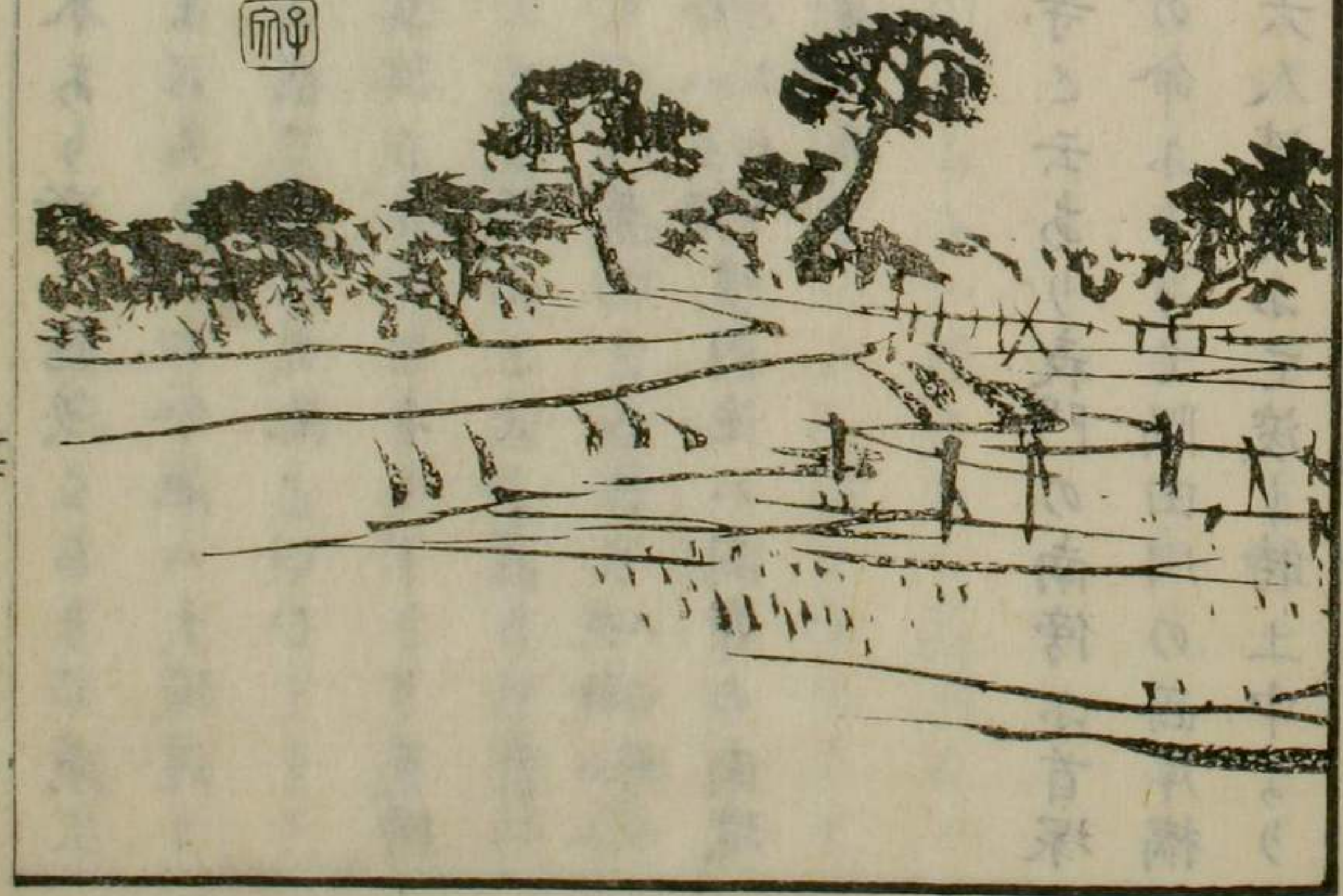
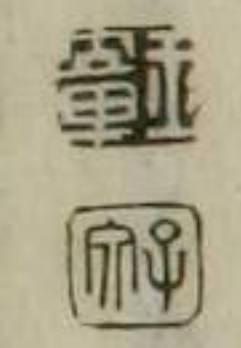
隅田川の水際ある堤を汐除堤と云昔ハ此汐除ふて出水をも  
防きし漸々川筋埋りて川邊の人家度々洪水の患有ふ付て  
慶長の頃徳川家康公新ふ今の大堤を築造ありて人家を堤内  
ふ移させ給ひし也此堤甚長き故ふ龜田鵬齋の詩ふ長堤十里  
といへり此堤隅田村の介を隅田堤と云堤の外汐除堤までの  
間を字堤外と云皆田ふして毎年秋ハ雁數多来てあさるあり  
又夏ハ水雞晝夜ともに鳴あり堤内ふ昔ハ池四つあり所謂白  
鳥池、四分池、荒神池、境内池等あり白鳥池ハ字中通りの南端大  
堤の際ふあり昔白鳥數多棲たりと云小さき中嶋あり白鳥嶋

外田落雁 黄却化  
 微雨夕陽村外  
 田平鋪一幅  
 衍波箋李  
 成之水惠崇  
 雁落墨数り  
 描遠天 篁園書



正人多川  
 堤乃外田  
 幾多たもろそ  
 抄知川  
 可あ即字  
 か季此  
 おちろく記

銘本まゝ



と云女竹生茂り木穀の老木二本あり漸々池淺くありて蓮生  
を故ふ蓮池と云今ハ白鳥ハままはありぬ四分池ハ大堤通り  
多聞寺の西北の方一丁より在て俗ハ大池といひしとそ  
ゆつの頃ハ田地とありて今ハ其跡とハ知れをありしり荒神  
池ハ多聞寺の北の方境内ハ接して荒神山と云小高き竹藪ハ  
り其北西ハ隣れる小池ふて是も今ハ蓮田とあれり荒神山ハ  
禿祠あり三宅荒神と彫てあり今ハ多聞  
寺の門内ハ移して跡ハ開墾畑とあれり境内池ハ同寺の南境  
内ハ續きたり水深くして菱生をるあり

○首塚

大堤の内梅若より東南ハ正福寺と云あり表門の南傍ハ首塚  
と云碑あり是ハ天保の始幕府の命ふよりて隅田川の西岸橋  
場村潮入の洲を坂田三七郎外六人請負ふて浚し時土中より

頭骨あまと出しを収集て此處ハ埋め碑を立て首塚と云あり  
此塚ハ立願をれハ頭の病ハ何ふても平愈までて香花を手向  
る人あり碑の銘ハ

隅田川の邊橋場といへる川津らふいとあく高洲のい  
てきて行水の流を狭め水増る時ハいとく障とあれりと  
て此あとよりハままふもの等とて頃慈悲をるをまふ  
かゝるとき恵ふて取拂ひてよとの仰こと有るその事  
うけをまゐりてほろふまつりたるふうかちける土のこ  
こかゝこより數多の髑髏出れハいともし哀ふお  
もひてむとつふ集めとふらひてそのあるしをとつるハ  
天保四といふとりの四月あり鳥

藤ハら乃定明

水の淡と消し心を汲ぬきハ今ハ袖の濡ふるる肌  
とを經し夢とや今ハ覺ぬらん心安かれ毎の下ふて  
碑の裏に係り役人并に請負人の姓名ありと、畧に

因ふ云或人の説に橋場ハ昔川底ハ大なる石埋まりて  
有し故に舊名石濱と云ふ亦一説に潮入の洲ハ甚大なる  
石埋まりてありといへり隅田村の老人加藤文五郎と  
云ハ寛政の末に生れし人ふて同人云潮入ハ大石の有と  
と老人ハ皆覺て居る也先年小菅御殿御普請の節潮入の  
東北ある附洲の土を掘取て地形ふしたる時地の底ハ甚  
大なる石のありしを慥に見たり此時潮入の百姓老人等  
打寄泣て歎願したる故に潮入の方を掘ることハ止ふ  
まじとぞ

○鐘ヶ淵

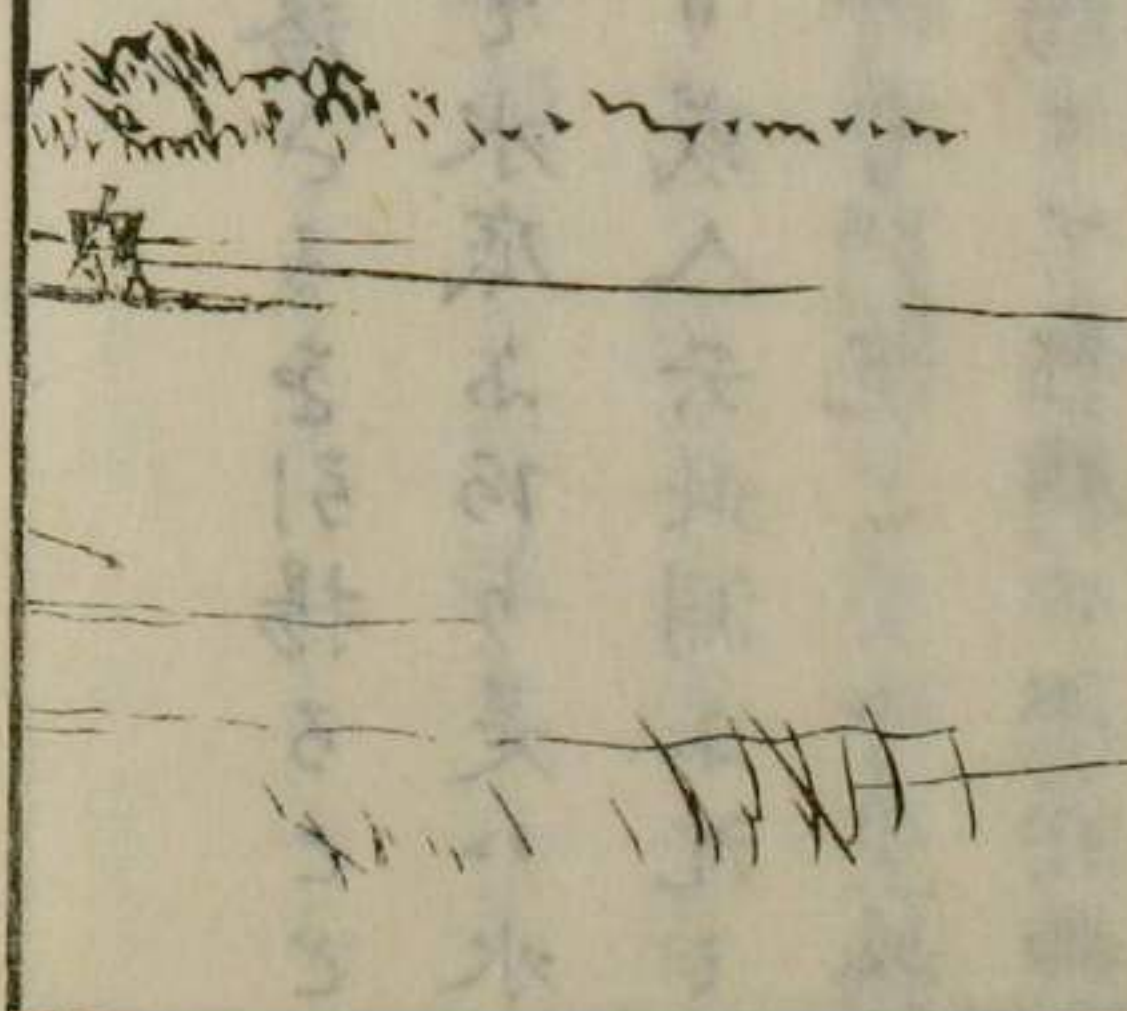
隅田川の鐘ヶ淵と云ハ昔此淵に釣鐘の落たるを引揚ること  
叶はばして捨置し終に淵の主とありて水底にあり是ハ水  
神のをしみ給ふ故ありと里俗の口碑あり或人云此淵に沈  
たる鐘ハ昔千葉家三侯城の在り頃祈願所普門院と云寺豊嶋  
郡石濱にありし其後龜戸村に替地を賜りて移轉の際諸物  
品を舟に積りて運ひけるに過ちて半鐘を此淵に落せしを揚る  
こと能くは其終にありし淵の底に今も沈て有とぞ因て同  
寺に尋ねられハ専ら世人の口碑にハあれとも確ある證を尤  
當院ハ元豊嶋郡石濱に在しを此地に移されし也依て當院ハ  
豊嶋郡龜戸村普門院と書來れり龜戸村ハ葛飾郡あり故に御  
朱印改の節ハ毎度郡の違へるを御尋ねり右移轉の由を申上

鐘潭晴嵐

獨立蒼茫暮色新月  
波嵐紫深晴海種  
潭名在鐘何更注  
事無人問水濱

癡堂題

篁園書



其の如く

をくま

え

あけのち

とれとるま

春の如く

福羽美静



々れハ其通り書替て下附一給へりといへり昔の鐘ヶ淵ハ  
関屋の庭の真西ハ當り潮入の岸ハ寄て今附洲の中ハ水深き  
所あり此處あるへ古き村繪圖ハ詳あり今鐘ヶ淵と云ハ関  
屋の庭の汐除堤の崩きたる處の淵と云れるなり是此川の淵  
瀬の變遷したる實況あり按ふハ此鐘ヶ淵といふハ真の鐘ヶ  
ハあらざるへハ是ハ別ハ考あり

○若宮八幡宮

若宮八幡宮ハ若宮村の鎮守也昔八幡太郎義家奥州下向の時  
此所ハ八幡宮を勸請し榎の枝を折て逆さまふさして此度の  
軍勝利ありハ芽出榮ゆへと祈誓したるハ勝利ありて歸陣  
の節ハ芽出生榮たり年經て大木と云れるを逆さま榎と云別當  
を善福院と云始ハ彼の榎の大木有ハ依て夏木山東照院とい  
ひハを徳川家康公ハ東照宮と謚號ありハつぎ善福院と改

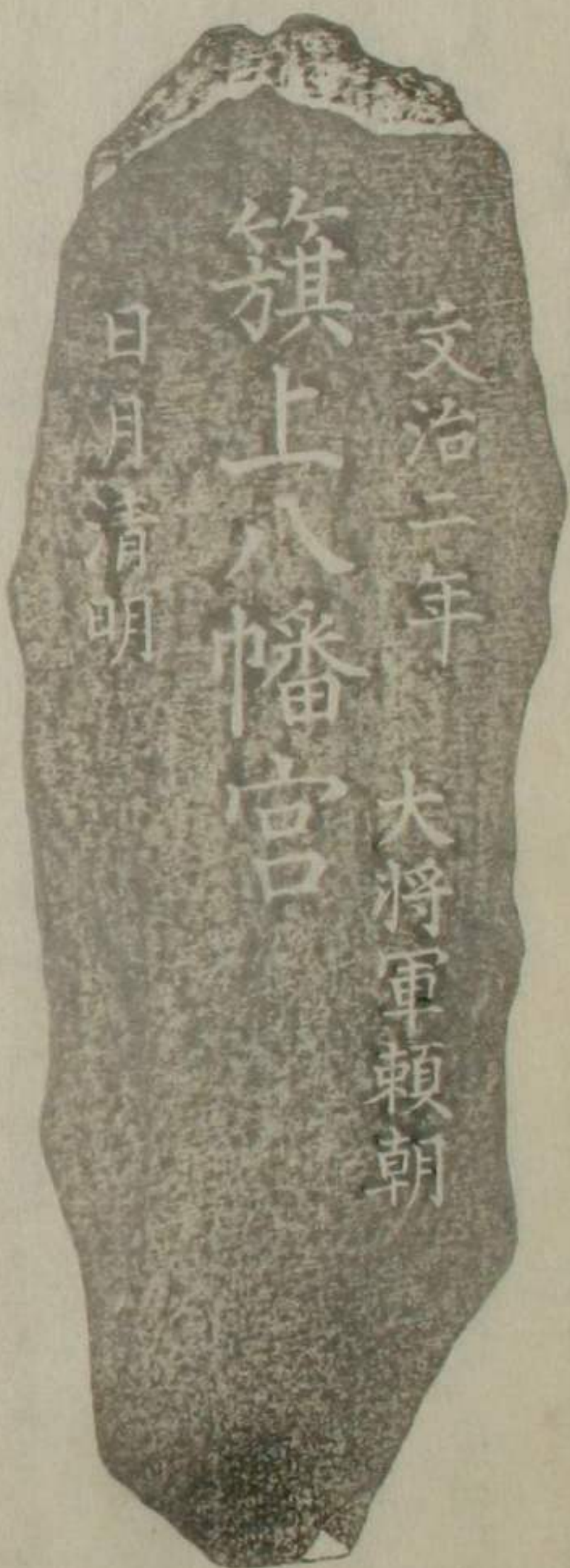
たり逆さま榎ハ文政の頃迄ハ境内田中稻荷社遙拜所の東傍ハ  
朽殘て有し今ハ絶果とり又社前ある大道の傍ハ生きたる小  
笹を燈笹と云ハ幡太郎馬ハ乘て通行の節小笹長く生茂りた  
るハ燈ハ是れ障り故ハ燈笹と云ハ村老ハいへり

○旗上石

隅田村字上の圖子ハ小山源右衛門と云農商あり先代ハつもの  
頃ハ宅地の内を掘しこと有ハ土中より出たるよハて  
ハとあけ石と云を持傳へて禿祠ハ納めざるを見ハ楕圓形  
の青石あり高一尺三寸横四寸七分あり甚古く見ゆれと彫刻  
したる文字ハあさやハなり其銘ハ左ハ記是此邸地ハかゝる  
石の埋りて在ハハなる故ハや

旗上石縮圖

表



裏



○多聞寺の狸

多聞寺ハ元隅田宿の南端ある奴池の北ふあり〜か天正の頃  
 今の地ふ移り〜也此寺の境内昔ハ竹藪高萱等の荒地ふて古  
 狸の住處あり〜故ふ人をたふら〜事ある〜あり〜故ふ  
 近傍ふ住めるもの甚難澁〜けり其頃の住職豪傑の僧ふて此  
 地を開墾〜寺を建て引移りぬ故ふ古狸ハ住所あるなり〜を  
 憤り毎夜出て種々の仇をなせり依て住職狸ふ説諭〜誠めけ  
 きとも聞らば〜て猶仇をふ〜る〜或夜本堂ふて物音高く  
 きこ返り翌朝見れハ彼狸死〜て居たり是本尊毘沙門天の  
 罰〜給ひ〜也とて死骸を埋免松を植て狸の墓と云今門内ふ  
 あるハ植繼さる松あり松の本ふ甚古き青石の板の如き碑ふ  
 梵字一字彫さるを建てあり是ハ狸の墓碑ふハ阿らば文久年



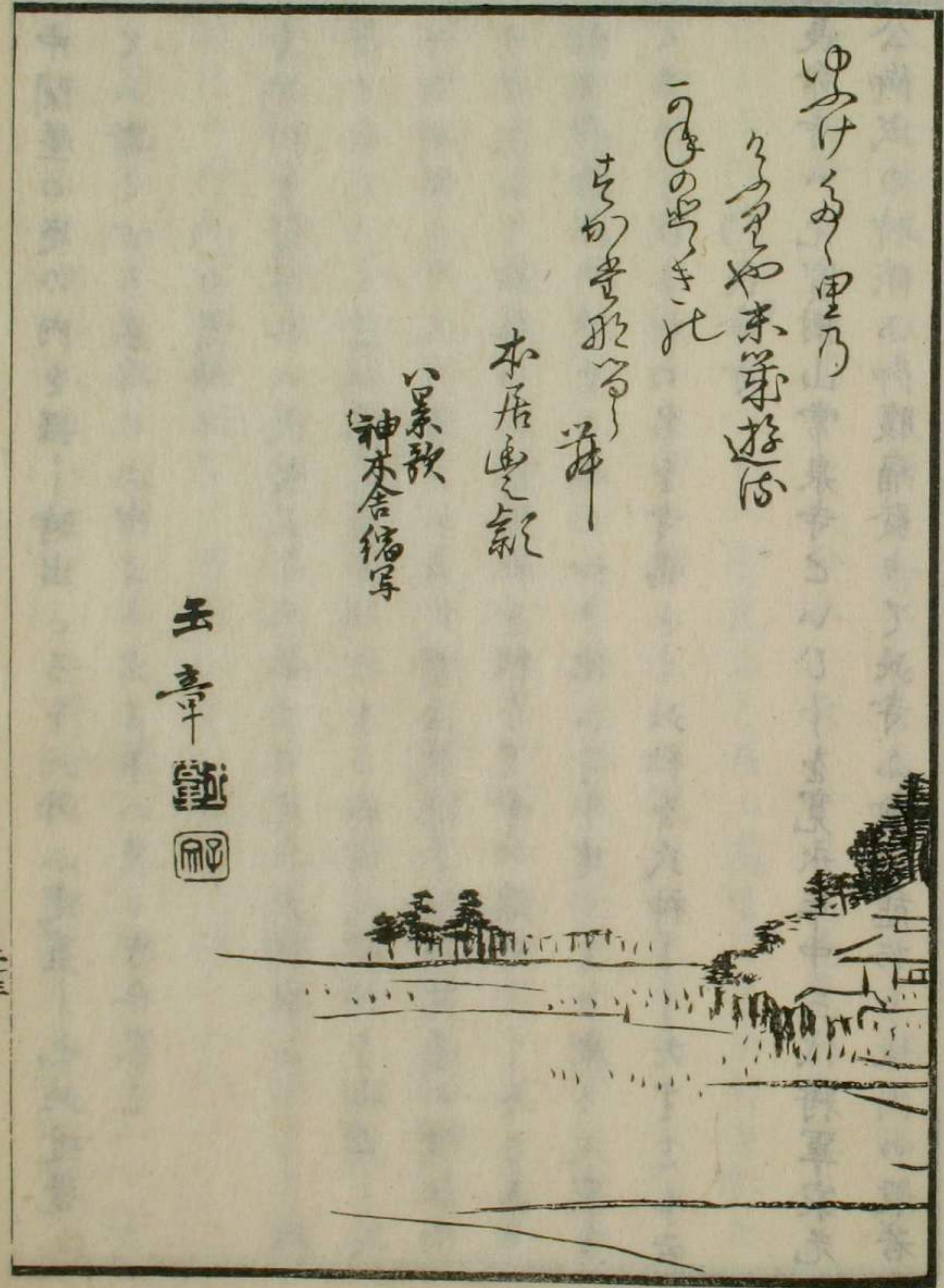


村寺晚鐘

茆屋疎籬欲  
夕暉孤村點  
暮鴉飛一  
聲鐘出深林  
裏不見山僧  
托鉢歸

霞菴居士題

篁園主人畫



ゆけり多し里乃

夕暉孤村點

暮鴉飛一

聲鐘出深林

裏不見山僧

托鉢歸

霞菴居士題

篁園主人畫

五亭齋



中関屋の庭の内を掘り時出たるを此所ハ建置し也此近邊ハてハ斯く古き墓碑の土中より出る事ハ度々有今畧す

○白鬚神社

寺嶋村白鬚神社ハ天曆五年比叡山の元三大師東ハ下りし時夢の告ありて近江國志賀郡塚打ある白鬚大明神を勸請したる由碑銘あり又一説ハ舊別當西藏院と云ハ開基の僧江州の出生ふて彼地の白鬚神社を移して寺の鎮守としたるあり始此邊澤沼の中なる嶋の如き地ハ寺を建しより漸く人家多くなりし故ハ村の名を寺嶋とし此社を氏神としたりとも云

○長命寺

長命寺ハ元寶樹山常泉寺といひしを寛永年中三代將軍家光公御成の時俄ハ御腹痛發りて此寺ハ御休憩あり地内の般若

水と云井水を以て服藥し給ひ忽ち治せり依て號を賜り寶壽山長命寺とし其井を長命水と云とそ此處芭蕉翁雪見の舊跡と云門前ハいさゝらハ雪見ふと給ふ處まてと云句を彫たる碑ありしを今ハ本堂の傍ハ立しり境内ハ芭蕉庵と云あり翁の死後門人創立したるよし翁の木像を安置せり脊の方ハ正徳四年の銘あり又神山多仲の篁葉塚あり神山ハひちまきの名人あり門人師の用るたる簧を埋て是を建しり宝曆二年あり

○牛御前社

須崎村牛御前社ハ祭神須佐之男尊清和天皇第七の皇子貞辰親王の神靈と兩社也皇子事故ありて此地ハ移り居給ひし元慶元年九月十五日ハ薨し給ひしを此所ハ葬り奉りたる由縁起あり按ふハ大日本史ハ延長七年薨とあり疑ふハ或人の説ハ古隅田川の

川上ふ牛嶋村と云あり粕壁宿の在あり其處ふも牛御前社と云あり向嶋のハ此社の移也と里俗ハ云とそ又此社ハ女帝社と稱して祭神ハ女神のよしいへり按ふハ須寄ある牛御前社ハ男神ハましませハ同稱別社亦或人云向嶋の牛御前社の神體ハ石の釋迦像ありと云説ありと按ふふ今什物ふ古き石の板の如き碑あり表ふ釋迦の像を彫て裏ふ貞觀十七年三月明王院と銘あり是の事あるへへ又按ふふ實ふ親王此地ふ居給ひへありハ親王を大人と稱し其地の嶋ふ似とるふ依て大人島といひへを後ふ牛の字を書けるふや又牛御前と云も此地大川ふ臨むたる岬ふて大人の岬といひ牛の御前と書てウレノミサキといひへを後ふ字音ふてウレノゴゼンとよみへあらむう又親王薨へたまひへを此地ふ葬り奉りて御墓を大人のみさきと稱しと

るをうへのこさたと訛へや此社の拜殿より東の方社地ふ接して弘福寺の境内ふ屬せる一堆の丘陵あり老樹小竹ふと茂りて物ふりたり是をへくハ親王の御陵墓ふハあらむや此寺ハ延寶年中創立のよへあれハ其前ハ社地ありへも知かへ確證あき故ふ後の参考ふ供ま

○三圍稻荷社

小梅村ある三圍神社ハ往古の社地ハ今の所より二三丁はり南の方の田の中に有て田中稻荷と稱せへをいつの頃より今この地ふ移してみめくり稻荷神社と稱しけるよへあり晋其角の雨乞の句ふ抄ふと地や田をる免りりの神ありとよめるハ元祿六年の大旱の時あり然れハ其頃ハ最早今の所ふ在へあるへへ三圍と稱するも何の由緒なるや知りへへ此社

ふハ末社とも石の鳥居都合八個あり本社の東傍ある竹藪の中ハ白狐祠あり棲穴もありて常ハ白狐をめぐり藪の前ハ男女並ハひこる古き石像あり男ハ烏帽子浄衣を着て女ハ常服の姿あり脊ハ生國上州安中四野宮大和時永居住武州小梅町元祿十四年五月十八日と彫たり何の縁由あるものハや又境内ハ其角堂あり木像を安置せり

○秋葉の森

長命寺より二丁餘東の方請地村ハ秋葉神社あり正應年中の創立と云始め千代世稻荷と云社ありハを元祿の頃別當満願寺秋葉山を合殿ハ鎮祭を祈願の利益顯然なるハ依て本多某侯の報賽ハて社殿を造營ハ種々の寄附物ありハより益繁榮ハたるハ社邊老木森々として所々ハ小丘あり又一株の老

松あり千葉の松と云境内廣く毎春花見の人群遊を

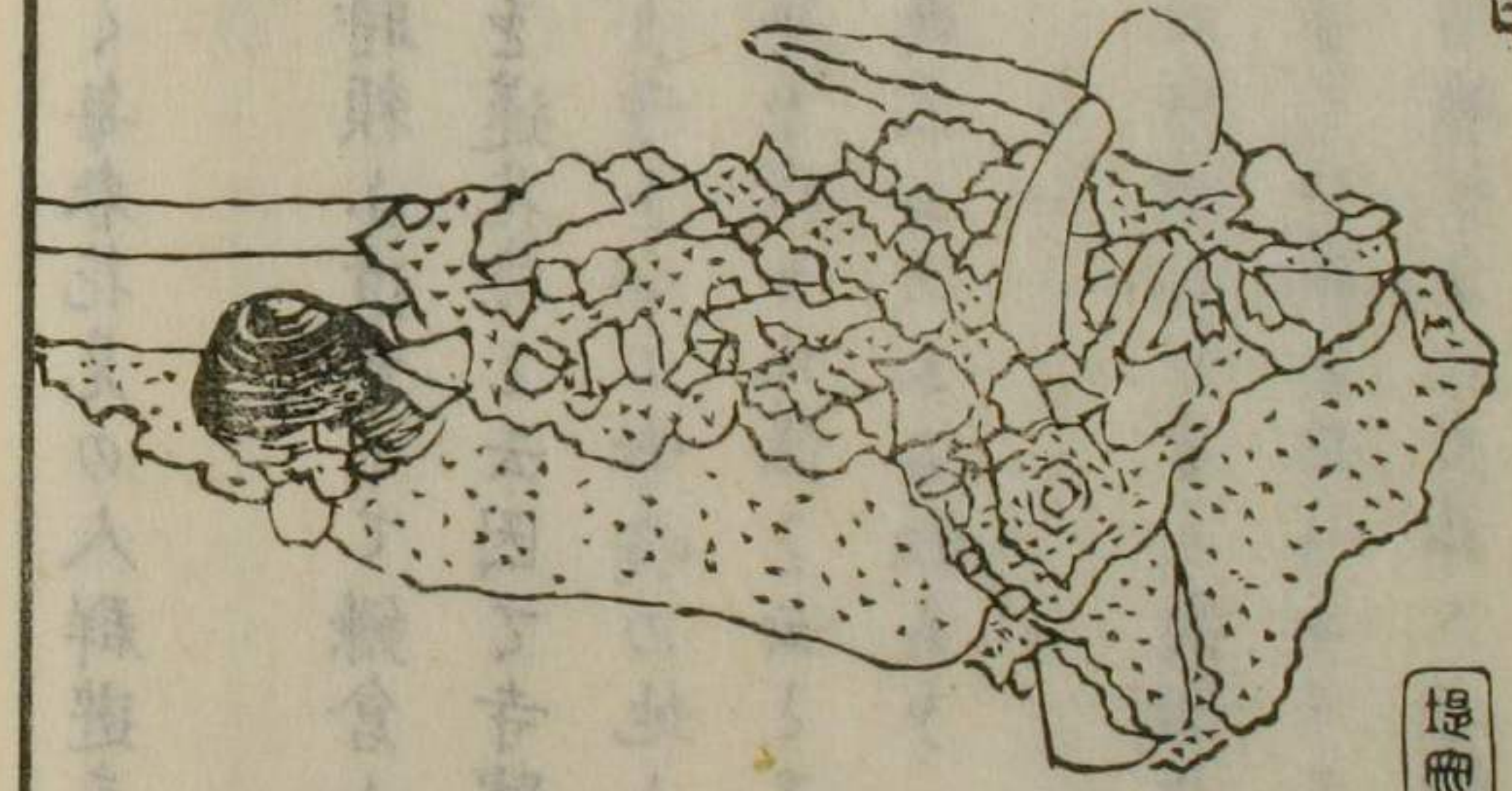
○蓮花寺

鎌倉將軍の頃北條經時の弟時頼ハ遺命ハて鎌倉ハ寺を建て聖徳太子を祀る經時の法謚を蓮花寺と云因て寺號と云經時の男頼助剃髪ハて住職とあり寺を今の寺鳴の地ハ移ハ故ハ寺の紋三ツ鱗ハて住職の苗字を代々北條と云とハ今の本尊ハ弘法大師あり本堂の前の庭上ハ大ハある松あり

○頼朝橋の礎

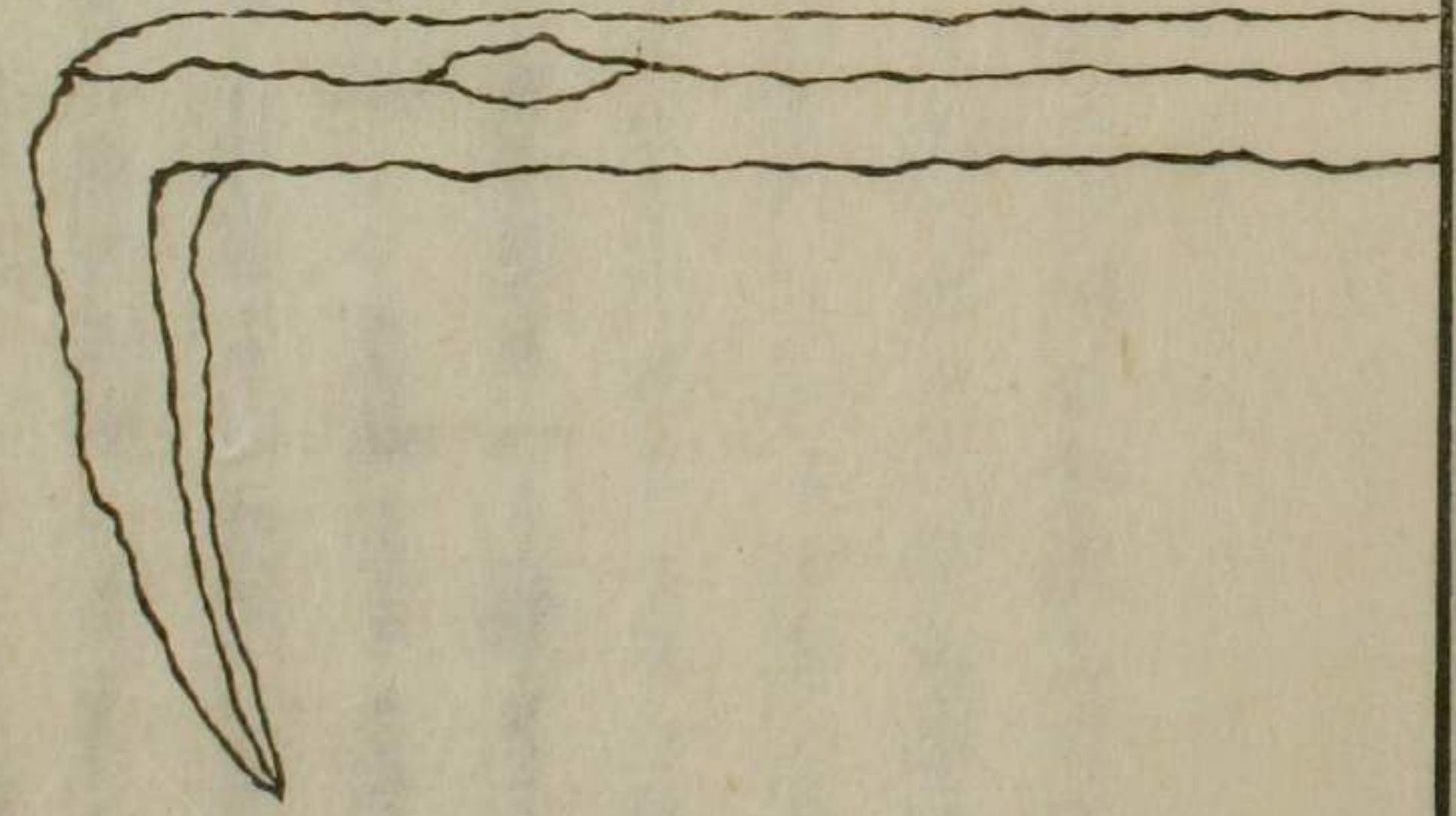
隅田川の水底ハ頼朝橋の杭の朽残りたるハ通船の妨害ハあるハ依て切取たる事ありと古く口碑ハ傳へたり又寛政年中幕府の命ハよりて彼朽殘れる橋杭を三尺はわり掘出ハて伐採ハ時泥中よりかきりひの出ハるハ持歸て坂田某の家ハ所

非是折戟沈沙鐵曾  
 自隅田川中出依  
 稀可認螞蝗絆  
 鏽蝕從昔存應  
 質聞昔右府東征  
 日架指正渡江時物  
 右府雄畧真無雙  
 雲蒸龍變知何術  
 胸中別有辨金鐵



鑄治海內歸混一  
 皆園誌

五月廿一日  
 音備古道  
 音備古道  
 音備古道



藏せるを隅田川神社に奉納して今ハ同社の什物とあれり此  
鍍ハ鍍ふて造り兩端の折曲りたる向き違へり俗に手違と云  
鍍あり圖の如く傍の曲りたる所ハ一塊の土砂に交りて蜆貝  
蠣壳石小砂利古釘あつきたり中ハ奇あるハ煙管の頭あり  
其形ち元祿頃の繪あとかかるに似たり真鍮あるに青く錆  
たり此一塊ハ鍍氣ふて粘着したるものなるへ珍らしきま  
ゝに縮寫してここに載せぬ

隅田川叢誌終

追録

○曳舟川

小梅村より龜有村まで曳舟川と云ハ中川の分流ふて琵琶溜  
より川原曾根の溜井に至り夫より龜有四ツ木寺島等の村々  
を過て小梅ある締切の水門より源森川に入る此處より西南  
二派に分き西ハ大川に注ぐ其中途ハ水門橋あり南ハ豎川に  
通ず此間を大横川と云曳舟川昔ハ本所深川の飲料上水也中  
川上水又水道とも云埋樋ふて廻流し小名木川以北富川町柳  
川町森下町邊まで埋樋有りと云元祿以後の頃より追々井  
を掘用ゐて上水を用ること少くありし終ふ不用ふありた  
り故に今ハ古上水と云其後曳舟の通ふに依て名とあれり今  
ハ龜有より篠原迄ハ曳舟あれとも夫より小梅の間ハあり

因ふ云近頃本所相生町二丁目豎川の川岸通北側ある川  
田某の邸内一文餘掘し時土中より古上水のコマと云物  
出たり松ふて二尺四方あり大樋より分水の竹樋の小間  
ありとそ同所近邊の地底ふハ棧橋の杭を埋れて有と  
云按ふ昔ハ川中廣く此邊迄川岸ありふや

○枕槁

枕槁と云ハ本所中之郷より向嶋ふ通ふ道の口ふあり此所ふ  
槁二つ續きてあり源森川ふ架ざるを源森槁といひ其北ふ有  
小槁を新小梅槁と云世俗此二槁を總稱して枕槁といひ也  
小唄ふふとつ双へし枕槁  
とありて其名きこはをり維新の後源森槁を改て枕槁と昔  
ハ此川あくて此邊皆森ふて五百森といひ又源森とも云後ふ  
川を疏通して源森川と云とそ今槁の北ある森を嬉の森と云

小唄ふ嬉の森や或人の説ふ昔本所石原より大川端まで廣き  
枕槁あといへり  
森ありて嬉の森といひあり今大川端ある華族松浦家の舊  
邸今安田某ふある椎の老木を嬉の森と云ハ其一樹の残さる  
あらむ此森ふ對せる大川の西岸なる古松を首尾の松といふ然きハ枕槁の北の森を嬉  
の森と云ハ誤あり小唄あるも大川端の嬉の森のことあらむ  
といへり源森川の中途ふ締切堤ありしを維新の後切貫て水  
門槁といは是を今ハ源森槁と云

○向島の花屋鋪

花屋敷ハ白鬚社の前より横一丁餘東ふ在り園主を佐原平兵  
衛と云其始ハいつの頃ふや昔より草木ハありしを今より四  
代前の平兵衛號を菊塙と云風雅の人ふて此庭園ふ四季とも  
花の絶さるやうふとて春秋の七草梅櫻をこめ種々の草木

を數多栽て雅趣を設け奇觀を供へ百花園と號して開園せし  
ハ文化の初也夫より向嶋の花屋舗と稱して平素看花の遊園  
とあれり殊ふ春の梅花秋の七草を賞觀を園中ふくのち此  
井かや乃ひめの井と二行ふ彫る古き碑あり此園三千坪餘  
あり昔鎌倉將軍の頃多賀藤十郎と云武家の邸地ありし事  
故ありて斷絶せし跡ふて周廻ふ構堀と云溝今ふ存在せり

○堀切の花菖蒲

堀切村ハ昔より四季の草花を培養し市ふ鬻くを以て一村の  
生業とあせり殊ふ名高き四方堀の花菖蒲ハ享和文化の頃小  
高伊左衛門と云者性來植物を愛し意を菖蒲ふ注ぎ始二三種  
を培養し猶新種を四方ふ求む其頃幕府の旗下本所北割下水  
ふ万年某氏花菖蒲を愛し奇花數種あり其内十二一重を乞受

又麻布龍土ふ松平左金吾氏花菖蒲を以て名あり乞て宇宙覽  
裳羽衣等を得たり其後富士登山の歸途相州より一種の花菖  
蒲を得て持歸る是を七福神と稱し此花數年を経て變化せし  
を醉美人と名つく是も又追次奇花を産せし牡丹咲或ハ狂  
ひ物と云ハ多く是より變生せしもの也又土州より十三種を  
得たり其内麒麟閣泉川の二種ハ其頃の名花ありき然して漸  
く一の花菖蒲園とあれり文政の頃ハ其子伊左衛門父の意を  
繼て益蕃殖を謀り天保の末ふ至りてハ多種の名花園内ふ充  
満せり安政三年の向嶋繪圖ふも堀切村伊左衛門の花菖蒲と  
あり其後尾張大納言殿遊覽ありて日本一菖蒲と親書を賜り  
たり猶維新の際松平家の花菖蒲を悉皆譲り受たり園内名花  
の變化實生の奇花年々彌増蕃殖せしと云明治十年米國某の乞



ふ依て花菖蒲數百根を彼國へ送る是より年々海外へ輸出を  
同二十年六月十四日明宮殿下御遊覽在らせらきより名花の  
盛ハ毎年六月中旬也と云此園を四方堀と云ハ昔此邸地の四  
方ハ構堀有リ故ありとぞ

○小松嶋

小松嶋と云ハ寺嶋村白鬚神社より北西ハあり堤外ハあり  
搗場の渡一場ハ接一たり元此邊ハお一あへて田地の乏なり  
一を明治十一年小野某田を埋め池を掘庭園として紅白の桃  
樹を數多栽又松櫻其外種々の草木を栽たり園内廣くして遊  
園とあれり遠く関東八州を見晴らして景色佳あり因て八州  
園といふ又松嶋ハ似たりとて小松嶋ともいふなり

○鐘ヶ淵紡績工場

大堤外梅若の北關屋川の北岸より綾瀬川の隅田川ハ注ぐ東  
岸迄字古川敷又元關屋の前栽畑等の田畑を殘らば埋て宏大  
ある紡績工場を建設一明治廿二年五月開業是鐘ヶ淵の東  
岸ハ當る故ハ名と也關屋の御庭跡ハ小野某の別荘とされり此年會社の前通大  
堤ハ櫻を植る今迄梅若より北ハ同廿四年地續二軒家と云  
所ハ在リ稻荷社を工場内元丹頂塚の在リ近邊ハ移して鐘ヶ  
淵稻荷神社と稱を開場以來毎年五月十二日ハ數千人の職  
工を休暇せしめ起業祭を行ふ其式嚴あり又餘興もあり

○川邊の沿革

明治の始新ハ隅田川八景を撰たる後大堤の内外漸々沿革せ  
り關屋の庭ハ同七年開墾して田とせり其後小野某買求て  
別荘と一池を掘堤を築き庭園とあり其他地續ハ皆紡績工場

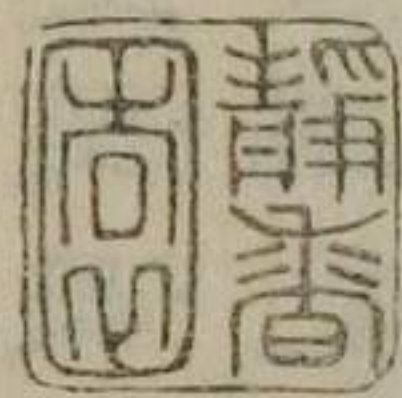
とありて器械の響晝夜絶間あり夜の雨乃閑ある音聞くハ昔  
の夢となりぬ又堤内ある白鳥池蓮池と云同廿一年埋地と成て蓮  
花の色香も跡消とり梅若の南堤外の田地も同頃より埋立て  
追次人家も出来ぬ今ハ水神の森の邊のこふ残る田の少く  
あり一故秋毎ハ雁鳴落る聲も聞けり夏夜も水雞の叩く音稀  
ふなれり因て八景の模様僅ハ廿年はかりの内ハ其實況の變  
化せる事是の如く然れハ繪と實景の違へる所あるハ此故也  
見る人怪む事勿れ是れあかき沿革を示せるものと知るへ

追録終

跋語曰。桑田變為滄海。由是觀之。古往今來。物變星  
移。所謂名所舊跡者。空湮沒滅絕於榛莽荊棘之  
中。而至於無聞。亦未可揣也。然則地誌編輯。豈可  
輕忽乎哉。夫掛弓雄君。余之文友也。元資篤賓。博  
聞強記。殊嗜歌學。王政維新之際。身數出入於  
戰場。真可謂文益兼備之士也。後奉職於隅田川  
神祇。已暇日編輯其地沿革名所舊跡。名曰隅田  
川叢誌。徵跋於余。余展讀之。則卷中挿入其地近  
傍八景之名画。画上掲詩。所謂有聲之画。無聲之

詩。歷歷存在於目前。其他墨江名所舊跡與其沿革。畢實探討。誅求莫不至盡。是事實俱備者。而編者之勞苦。真可謂大矣。苟播之於天下。傳之於後。則其功豈淺鮮乎哉。終書以塞其責云。

明治廿五年十一月上浣。丹波。增山守正。撰於東京駿臺鈴木街僑居。



星洲子戶齋書



明治二十五年十二月十五日印刷  
同 年 同 月 二十 日 出 板

定價金貳拾錢

版權  
所有

編輯兼發行者

東京南葛飾郡隅田村千四百八十一番地

矢掛弓雄



印刷者

東京市小石川區大門町二十五番地

青山清吉

發

雁金屋 青山支店

東京市本郷區春木町三丁目

賣

淺倉屋 吉田久兵衛

全淺草區北東仲町五番地

所

求古堂 松崎半造

全淺草區湊賀町十九番地

